

## 遊びの援助者としての保育者の役割

「停滞している」と捉えた遊びへのかかわりを通して

河辺貴子

(立教女学院短期大学)

### 1. はじめに

遊びを大切にする保育において、保育者は幼児の行動から遊びに対する意識や自己課題を読みとり、次に必要な経験を導き出して援助することが求められる。

小川は※保育者の援助の可能性は援助を受ける側、つまり幼児の自己形成力を読み取ることから導かれるとし、その具体的なあらわれとしての幼児の志向がどのように実現されているか、あるいは実現を阻止されているかを見定めることが大切だと述べている。保育者の援助の多くは環境を構成することによって行われるが、小川は保育者の環境構成は「幼児の一人ひとりの遊びへの取り組みや、集団による遊びの自己達成度をその都度診断して対応することが必要になる」と述べている。 ※『保育援助論』生活ジャーナル、2000

自分のイメージしたものを空き箱等で作るといったような個々の取り組みが中心になる遊びにおいては幼児の志向性を読み取りやすく、必要な援助も見えやすい。しかし、複数の幼児が集まって遊びを展開する場合は、必ずしも個々の志向性がある一定方向の志向性を生み出すとは限らず、小川のいう「集団による遊びの自己達成度を診断する」ことは難しい。例えば幼児の表情からは遊びが充実しているようには見えないが、その友達と遊びたいという欲求が高く、長期間にわたって同じテーマの遊びを同じメンバーで繰り返すことがある。こういう場合、保育者はどうしたら幼児一人一人の自己実現が図られるような遊びにすることができるのか援助に迷うのである。

本稿では、「停滞している」と捉えている遊びに保育者がかかわった事例を通して、集団による遊びの充実が個々の幼児の自己実現につながるための援助のあり方を考察したい。

### 2. 事例について

【前日の姿と保育者の願い】

2年保育5歳児11月中旬。男児4名水族館に遠足に行った翌日、R児、N児、M児、S児の4名が「水族館ごっこをやろう」といい、折り紙で魚を折り始める。しばらくするとS児が「外に行って遊ぼう」と言い、折り紙はそれぞれがロッカーにしまって戸外に出て行き、4人で鉄棒やブランコにのって遊ぶ。どうし

てS児が戸外に誘ったのかを保育者は把握していなかったが、このところこの4人は遊びを決めたあとにS児の意見で突然に違う遊びに取り組む状態が続いている。そこで保育者はS児以外の3人にも ①自分なりの目的をもって遊びに取り組む面白さ ②友だちと同じイメージや目的を持って遊びを進めていく楽しさを味わって欲しいと願っている。

【当日の姿】

———— 次頁の表参照 ————

### 3. 援助行為の検討を通して得られる視点

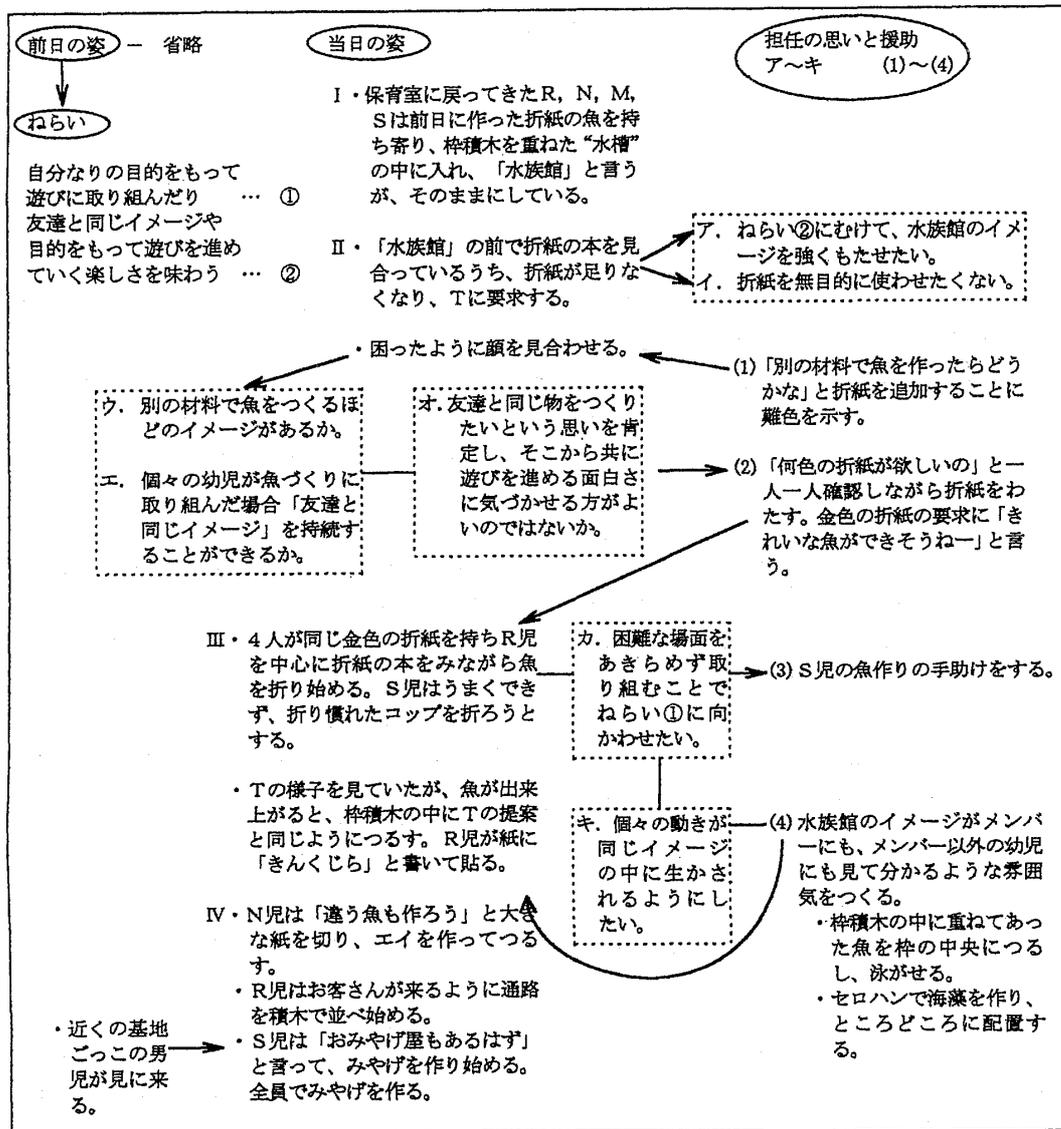
#### (1) 集団の遊びが行き詰まる要因を個々の幼児の自己課題から読み取る

保育者は上述の②を経験させるために、4人が関心に向けている水族館ごっこが適切だと判断し、それを実現させる方向で援助をしていこうと決める(ア)。4人は遠足で行った水族館を再現したいという共通の遊び課題をもったものの、それをどう実現していけばよいかの具体的な見通しをもっていない。特に遊びの主導権をとることが多いS児のイメージが明確でないことが遊びの方向を曖昧なものにしている。だからこそ使い慣れた素材である折り紙にとりあえず取り組んだのだろうが、保育者はこの意味を捉えず「折り紙を使わせたくない」(イ)「別の材料で作ったらどうか」(1)と投げかけたが受け入れられなかった。

次に必要な経験は遊びを通して積み重ねられていくものだが、遊びの実現を焦って幼児の行動を指示するような働きかけは意味がない。一人一人の遊びの課題(ウ)(エ)を明確にし、幼児の現状を肯定し(オ)、その上で援助の方向を見定める必要があるだろう。

#### (2) 具体的な援助の手だてとして提示される活動や環境の潜在的可能性を読み取る

4人の反応から「別の材料で魚を作る」ことは幼児の関心の範囲ではなく、またそれを自己課題とするほどの素材経験が不足していると判断した保育者は、折り紙を使うならば目的的に援助を修正し「一人一人に欲しい色を聞いて手渡しにする」(2)という行為をとった。幼児はこのような保育者の期待を受けて「折り紙を折る」ことに意味を見いだそうとする。ところが「折り紙の本」は子どもに正確に同じものを作るこ



とを要請するような潜在的な可能性をもっており（文化的価値）、自由な発想で素材を用いて魚などを作り水族館を再現して欲しいという保育者のイメージとはますます離れていき、また幼児自身も水族館を作ろうという共通の課題との接点を見いだせない。

幼児理解はすべての保育行為のベースといわれているが、幼児の行動は環境にかかわることによって生まれることを考えると環境そのものへの理解が不可欠だろう。それは単にかつての教材理解のようにその教材の特性を熟知していればよいというものではなく、幼児の自己実現の方向性に照らし合わせて、幼児がかかわりをもとうとしている環境や活動の経験の潜在的可能性を読み取ることである。

**(3)遊びの「状況」にかかわって幼児の内的動機を高めることにより、遊びの展開の具体的なイメージをもたせる**

集団の遊びは人、モノ、場が有機的に関連したときにある状況が生み出され、それが他者と共有されたときに成立する。はじめはモノづくりに関心を向けることで水族館という状況が生まれると予測していたが、そのための援助は有効ではなかった。そこで保育者自身もモデルとして動き状況をつくる援助へと修正した(4)ところ、R児N児M児もそこから具体的な遊びのイメージをもち自分なりに動き始め「友達と目的をもって遊びを進めていく楽しさを味わう」経験を積むことができた。

遊び自体が面白くなければ幼児の自己実現は図れない。遊びが充実するためにはどうしたらよいかを考えていくことは大切であるが、以上のような視点をもって援助の方策を探っていく必要がある。